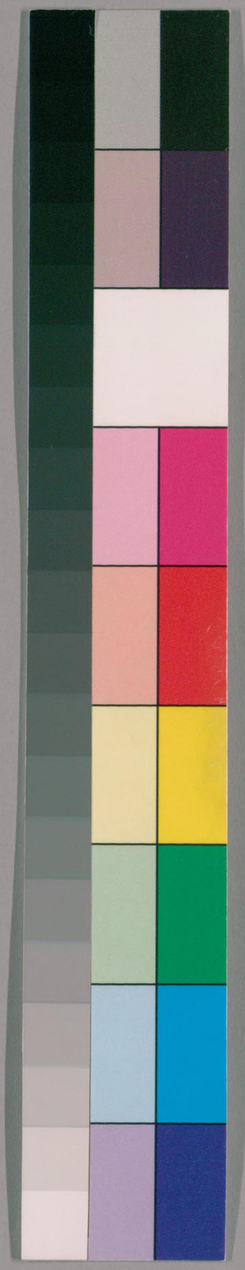
857
55
取扱注意
西入



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55
ガラス使用

四季を六巻にすうは六義を表
して又六帖あるとかこと也

日 是迄義の序歌又は賀など作
なをり冬民人九二首の行古まで
は行を入行にあり続きうる事未乃
歌ふは賀の事の序にはあらねど
こは歌かろくてぬき経緯撰のさ
てぬきこ

二 山里は冬もさびしきあるれもとり
まさりてさびしきとしつねこその字
おろく枯をもこころくうつまき多枯は
枯野のふるきつねて今もあるこ
そのうら枯はさびしきるれもとり
きてみてそこのつ

三 月のさやうやうつる水のうへ
うをみて月の歩むまでおを
まもりひろこと

志州 桑名屋蔵書 三之印

二 山里はよこと人こそさびしけれ
人めも草もかれぬと思へば

三 杉間より月のもりくる影見れば
冬の夜ふけぬ山寺の庭

是忠親王の男也右京大夫正四位下
源宗于朝臣

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

四 久さまにいでゝきゝのうのやまのまつとしきかばいまかへりこむ

五 春霞たなびきにけりもゝ鳥のこゑのかぎりはきかまくおもへば

六 ぬれつゝぞしゐてをりつるうたゝねに恋しきひとをみるとしらずて

七 山川にかはづなくなりうべしこそ井手のたまみづかげだにみえね

八 あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほしまさりける

九 わがやどの花みるまでにほととぎすいまこむとのみなにやきかまし

十 ちりぬればのちはあくたになりぬともなをこのはなはわすれざらまし

十一 ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くゝるとは

十二 ひさかたの光のどけき春の日にしづこゝろなく花のちるらむ

十三 あすもこむいまもきたりとおもふまにかくれてはやきものは涙か

十四 ふるさとは花のにほひぞむかしなるあるじは春をわすれざりけり

十五 さくらばなちりかひくもれおいらくのこむといふなるみちまがふがに

十六 ちりぬとてかへりこぬものゆゑにこそ花をしとおもふ人もこがるれ

十七 ちりぬればこふれどかひもなきものをはかなくもあだになすかな

十八 ちりぬればこふれどしるしなきものをいたくなわびそ

十九 ちりぬればこふれどかひもなきものをいたくなわびそ

二十 ちりぬればこふれどしるしなきものをいたくなわびそ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

春風

十三 湯ちくふるまでもとらぬ春の日の
ゆふべの風は花の香ぞする

十四 みよしのの白雪ぬこやまもとく
いろまさりゆく人をとふまで

十五 白雪のふるさと寒くなりぬれば
よしの山さへ風はげしかり

十六 雪のうちに春はきにけりうぐひすの
こほれる涙いまやとくらむ

十七 春たてば花とみるまで雪のふれば
ふるさと寒くうぐひすぞなく

十八 みよしのの山もとかすみたちぬれば
花とみるまで雪ぞふりける

十九 ねぐらとふ鳥の羽音に朝戸あけて
雪をぞ分けし人もとはぬに

よしみ
もふる

二十
春あさみ
もふる人
もとめ

二十一
春ごとに
梅のもふる
あるじ
こゝろ
もとの
梅のむら

管主敏達七代の孫峯守男也

二十二
春ごとに
花のもふる
小野
こゝろ
みち

二十三
春ごとに
花のもふる
人
こゝろ

二十四
春ごとに
花のもふる
こゝろ
梅

二十五
歳暮
つごもり
年
梅

二十六
梅
花
春
雪

二十七
雪
ふる
梅
花

二十八
雪
梅
花
春

二十九
梅
花
春
雪

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

二十六 年ごとのもみぢをかざすたびごとに
をとこやまとはふみしだくらむ
こころあらん人にこの歌をたてまつる

二十七 貞松顕歳寒
ねとならばもろともにぞあらまほしまつにかはれるふゆのいろかな

二十八 歳寒の千とせのうちをかぎりとや
てごころのみどりをいろにみるべきを

二十九 歳寒ハ
花ゆゑにハかくこころに
後のうきをさへこれりそのこゝろ
もかくのごとくぬべし

二十八 ひさかたの雪のしらえのいとなれば
花ももみぢもあるべくもなし

二十九 雪降ればつもるものなりつもるものなり
つもるよもみもちぬ雪ぞふる

三十 ひとこゑに
ほとゝぎすなくさつきあやめ草
あやめもしらぬこひもするかな

三十一 恋歌
かりとゆく
ふみわけてとふ人もなし
おくやまのもみぢのうへにふれる白雪

三十二 恋歌
おく山のもみぢをみるにつけても
ものおもふ秋はかなしかりけり

三十三 恋歌
秋の夜の月のひかりしあかければ
くらきよりこそものはおもへ

三十四 恋歌
秋の夜の月のひかりしあかければ
あやなくものをおもふころかな

三十五 恋歌
秋の夜の月のひかりしあかければ
あやなくものをおもふころかな

三十六 恋歌
秋の夜の月のひかりしあかければ
あやなくものをおもふころかな

三十七 恋歌
秋の夜の月のひかりしあかければ
あやなくものをおもふころかな

三十八 恋歌
秋の夜の月のひかりしあかければ
あやなくものをおもふころかな

三十九 恋歌
秋の夜の月のひかりしあかければ
あやなくものをおもふころかな

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55
ガラス使用

大空の月の光し清ければ
かげ見る水ぞまづこほりける

一　読人しらず

我君は千代にましまさむ
さざれいしの巌となりて
苔のむすまで

二　読人しらず

わが君は千代に八千代にさざれいしの
いはほとなりて苔のむすまで

三　藤原興風

君が代は尽きじとぞ思ふ
かしこきや天の下なる民の竈に

四　読人しらず

わが君は千代に八千代に
さざれ石の巌となりて苔のむすまで

五　読人しらず

君が代は限りもあらじ
長浜の浜の真砂の数はよむとも

六　読人しらず

我が君は千代に八千代にさざれ石の
巌となりて苔のむすまで

五　読人しらず

君が代は限りもあらじ
長浜の浜の真砂の数はよむとも

六　読人しらず

我が君は千代に八千代にさざれ石の
巌となりて苔のむすまで

五　読人しらず

君が代は限りもあらじ
長浜の浜の真砂の数はよむとも

六　読人しらず

我が君は千代に八千代にさざれ石の
巌となりて苔のむすまで

五　読人しらず

君が代は限りもあらじ
長浜の浜の真砂の数はよむとも

六　読人しらず

我が君は千代に八千代にさざれ石の
巌となりて苔のむすまで

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

七 ちりかきくもれるそらのけしきにてさくらのはなのあくるをまつかなよりあり

清原深養父 きよはらのふかやぶ

八 亀七年きさいの宮の屏風のうたあつめてたてまつれとおほせられし時に

清和天皇 せいわてんわう

九 年ごろつかうまつりてしりぞきて後に花の盛りに京を思ひやりてよめる

僧正遍昭 そうじやうへんぜう

十 梅の花それかあらぬかひさかたの雲のうへまでにほひぬるかな

藤原清経 ふぢはらのきよつね

十一 春たてどさくらの花のにほはねばこころのうちにものぞかなしき

紀友則 きのとものり

十二 ひさかたのひかりのどけき春の日にしづこころなく花のちるらむ

紀貫之 きのつらゆき

七 桜花ちるかまがひにみよしのの山のしら雪きえやしなまし

在原業平朝臣 ありはらのなりひらのあそん

八 かすみたつ春の山辺のうぐひすはこゑのかぎりや花をしむらむ

きよはらのふかやぶ
清原深養父 左京亮 さきやうのすけ

九 年をへてはなのかがみとなる水はちりかかるをやくもるといふらむ

僧正遍昭 そうじやうへんぜう

十 梅の花にほふ春べはくらぶ山やみにこえてもかをたづねてむ

紀友則 きのとものり

十一 ひさかたのひかりのどけき春の日にしづこころなく花のちるらむ

紀貫之 きのつらゆき

十二 ぬきみだれちる白玉かはたれにまがへてをれるわれぞわびしき

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

十三 我四かんの心ちこそすれ

十四 わを後にうき今さらの浦風
こまんこそ名ろしまふかくうらこそ
あれいそのかこ

十四 万代をわかむ
もちの
かな

素性法師

十三 霞る空
あるぬ
こ乃年
ふる
みの
賀よ
ふる

春
業平
男之

十五 序ばかりを頭に置りなをいハ
ばかりの心ばへなり

十六 船頭うた
屏風の為に頼まれてよめるとかや
乃ふねのうた十二首ハ皆の作ゝ

十七 うらの年をとよらかなのこと
皆ゝ作之年ゝわりなきうた

十八 船頭之事ゝ

十五 おもふ
かな

十六 ふねさ
ふる
ふる

十七 夏

十八 秋

満つ之内大伴之黒主ハ
和泉の大掾之事ニ而
右大将藤原朝臣
乃
作ニ
乃
孫
女

十九　春なれや

二十　月夜よし夜よしとて人のいたく更かしつるに

二十一　題しらず

二十二　ゆえよしある人の八十賀しけるに

二十三　題しらず

二十四　題しらず

二十五　題しらず

二十六　題しらず

二十七　題しらず

二十八　題しらず

二十九　題しらず

三十　題しらず

一　題しらず

二　題しらず

三　題しらず

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

九 思へとも身をしわけねは

十 おほつかな誰にか問はむ

十一 春霞たなひく山の

九 思へとも身をしわけねは

十 おほつかな誰にか問はむ

十一 春霞たなひく山の

九 思へども身をしわけねば

十 おぼつかな誰にか問はむ

十一 春霞たなびく山の

九 思へども身をしわけねば

十 おぼつかな誰にか問はむ

十一 春霞たなびく山の

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

十三 はるのよのゆめのうきはしとだえして
みねにわかるるよこぐものそら

十四 さくら井のおしとやいはむふくかぜを
いとふこころはさくらにぞまし

十五 あをやぎのいとよりかけてたれこめて
はるのくれぬるものとかはしる

十三 つまもこもよのかみよこと人もをや
えそもしらぬ今こむやとそ
ありやなしやとをやもあはぬ
あひもみるまくほしきかなとも
まよふまでなにかはものをおもはむと
とくるこころをたれかしるらむ

十四 さくら井のもとにやどれるふくかぜを
いとふこころはさくらにぞまし

十五 あをやぎのいとよりかけてたれこめて
はるのくれぬるものとかはしる

源宗于朝臣

良峯

十六 たつたのかはのもみちみなながれて
つくりこそをれにしきおりかく
ちはやぶるかみよもきかずたつたがは
からくれなゐにみづくくるとは

十七 ちはやぶるかみよにもきかずたつたがは
からくれなゐにみづくくるとは

賀歌

十六 たつたのかはのもみちみなながれて
つくりこそをれにしきおりかく
ちはやぶるかみよもきかずたつたがは
からくれなゐにみづくくるとは

十七 ちはやぶるかみよにもきかずたつたがは
からくれなゐにみづくくるとは

賀歌

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

十八　なるも山あるまでにおもふこと
きくしもあれどいはでのみこそ
あまたとも

十九　白山にかかるにごりを見るにつけ
こしのしらねとうたふをぞきく
まろ女のもとより

二十　ふるひとをいかでかはやもみてしが
おもひもよらぬ人のこふれば
もとかのるよしにてつかはしける

かへしの伝遺唐使がもたりける船

二十一　をとにのみきくの白露よるはおきて
昼はきえつつものをこそおもへ
貫之

二十二　秋霧のたちかくすらんをぐら山
ふもとの里は後れやはする
春宮の御もとより

二十三　九月晦日にをれる菊に
かりてこよ秋をおくらでにほふ菊
しぐれてのちはかひもなきかな
返し

二十四　ぬき捨てし秋のしるしもなきものを
なにかはつゆのおきまどふらん
寛平の御時菊の花をよませたまひける
ついでに

二十五　ひさかたの雲のうへにてみるものは
秋のもとなる菊にぞありける
秋の夜月を

二十六　もろともにながめてのちは秋の月
ひとりしみるものとしらずや
秋の月を

二十七　秋霧のたちかくすらんをぐら山
ふもとの里は後れやはする
春宮の御もとより

二十八　ぬき捨てし秋のしるしもなきものを
なにかはつゆのおきまどふらん
寛平の御時菊の花をよませたまひける
ついでに

二十九　ひさかたの雲のうへにてみるものは
秋のもとなる菊にぞありける
秋の夜月を

三十　もろともにながめてのちは秋の月
ひとりしみるものとしらずや

二十三 春たつ心をよめる 紀とし

はるくるまゝにたつ霞

二十四 春のそらなるにたつ霞を

そらいきしるしとやいはん

二十五 人やまつ

人やまつ

二十六 深さう

二十七 春来ても 兼盛

花と申ス利基二男ノ

二十八 人を思ふこゝろの

ふかくして空ゆく雲のたえまなる

二十九 ふる雪のしたにこゝろのふかくして

花ぞ春ともしらるゝ人のみ

三十 忘れ草

忘れ草

三十一 春ごとに

春ごとに

三十二 かつちるも

かつちるも

三十三 春ごとに

春ごとに

三十四 春ごとに 兼盛

花と申ス利基二男ノ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

雪をよめる　つらゆき

三十八　久方の天の原より雪の花ちりくるごとに春は来にけり

三十九　つもるをもいとはぬ人のためなれや山の高きに降りまさるらん

仙法師

四十　山風のさそふ花よりあるものを誰かは雪と分きて見るらん

僧遍昭

四十一　春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色を増すらん

仙法師

四十二　おとにのみきくの白露よるはおきて昼は思ひにあへず消ぬべし

仙法師

雪をよめる　つらゆき

三十八　人の見ぬ時だにうれし梅の花折りてかざさむ老かくるまで

三十九　雪ふれば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける

僧正遍昭

四十　山里は雪ふる時ぞさびしさはまさりにけりや人の通ひも

四十一　雪の降るをよめる　紀友則

白雪のところもわかず降りしけば山路も知らず成りぬべらなり

四十二　雪の降るをよめる　凡河内躬恒

白雪のふりしく時は山里の人目も草も共にかれぬる

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55
ガラス使用

三十三 ふるさとの花の上こそ
かすみつゝのどけき春の
しるしなりけれ

三十四 ひさかたの光のどけき
春の日にしづ心なく
花の散るらん

三十五 あすもこむ
ふるさとやまもみるもの
かすみこめずは
花のかげかは

三十六 春霞
たなびく山の
さくら花
うつろはむとや
いろかはりゆく

三十七 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

三十八 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

三十九 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十一 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十二 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十三 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十四 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十五 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十六 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十七 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十八 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

四十九 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

五十 春霞
たちかくせども
さくら花
ちりのまがひは
しるくぞありける

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55
ガラス使用

三四 ねれはこそあの古里の春の夜のゆめをもうつつともわかれ
三五 こととはんのこるくまなくいでにしをうらみてもなほうらめしきかな
三六 明也

四十 少をもとへとものおもふころなれはかけてよるなくをもとへとぞなく
四一 さをしかのわきもこかためおるはきのにしきをたれにきせんとすらん
四二 ちはやふるかみのいかきにはなさけてしめもとまらぬ秋のしらつゆ
四三 ふるさとはあれにしをりにけりしのふにつけてしのはるるかな
四四 ふるさとはあれにしをりにけりしのふにつけてしのはるるかな
四五 ふるさとはあれにしをりにけりしのふにつけてしのはるるかな

三四 かねてよりしらつゆなからおくやまのもみちをみるはかなしかりけり
三五 ちるもまたおしかりけりさくらはなうきよのはるのかぎりなりとて
三六 ちるをみてあはれとおもふこころこそちりかふ花にまさりけるらめ
三七 ちりぬれはこふれどかひもなきものをはかなくもちるさくらかなとて
三八 ちりぬれはこふれどかひもなきものをはかなくもちるさくらかなとて
三九 ちりぬれはこふれどかひもなきものをはかなくもちるさくらかなとて

四十 結ふとてあかすこよひのしらつゆはありしにまさるものにそありける
四一 あきのよのつきのひかりしあかければくらきやみにはまどはざりけり
四二 あきのよのつきのひかりしあかければくらきやみにはまどはざりけり
四三 あきのよのつきのひかりしあかければくらきやみにはまどはざりけり
四四 あきのよのつきのひかりしあかければくらきやみにはまどはざりけり
四五 あきのよのつきのひかりしあかければくらきやみにはまどはざりけり

四六 きくハうつろひてこそおもしろけれいろもかもしてくち葉よりけるとも

四五 ちる花をおしむこころやとまるらんわかれてのちもかをとどめたる
四六 ちりぬとてはるのやまへもかへらねはなきてとまれるうぐひすのこゑ
四七 ちりぬとてはるのやまへもかへらねはなきてとまれるうぐひすのこゑ
四八 ちりぬとてはるのやまへもかへらねはなきてとまれるうぐひすのこゑ
四九 ちりぬとてはるのやまへもかへらねはなきてとまれるうぐひすのこゑ
五十 ちりぬとてはるのやまへもかへらねはなきてとまれるうぐひすのこゑ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55
ガラス使用

羇旅歌

安倍仲麿 難異流云々
不詳靈亀二年為遣唐使入唐 朝卜云云

あまの原ふりさけみれハ春日なる
みかさの山にいてし月かも

物名

あまくたる神の石船神さひに
ゆきあひの浜に波よせめやも

題しらす

あまつ風雲のかよひ路吹とちよ
をとめの姿しハしとどめむ

遍昭

天つ風雲の通ひ路吹閉ぢよ
乙女の姿しばしとどめむ

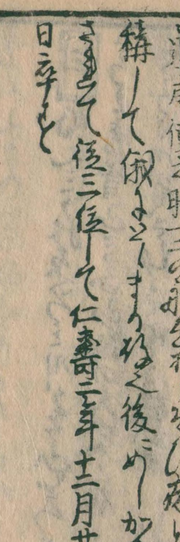
僧正遍昭

あまの原ふりさけみれハ春日なる
みかさの山にいでし月かも

安倍仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

二年為遣唐使入唐 終不帰朝 卜云云



の動くやうにて下の方へ流れ行くやうにて
人〻のいふやうは都へとてや
人〻のいふやうは都へとてや
たゞ秋にのみ心をとめて
たゞ秋にのみ心をとめて
ゆくかりの
ゆくかりの
ねをだにも
ねをだにも
なくは
なくは
いかにこゝろの
いかにこゝろの
ありてかは
ありてかは
いはぬことの
いはぬことの
葉をしるべき
葉をしるべき

三 ゆくさきの山のもみぢ葉ちりまがひ
ゆくさきの山のもみぢ葉ちりまがひ
うつる春日の山川の風
うつる春日の山川の風

三 都出でゝ
都出でゝ
いくかもあらぬ
いくかもあらぬ
旅の空
旅の空
いかにこの
いかにこの
ごろ
ごろ
秋風の
秋風の
吹くと
吹くと
思ふ
思ふ

四 初雁の
初雁の
はつかに
はつかに
声を
声を
聞きしより
聞きしより
雲井
雲井
はるかに
はるかに
秋風
秋風
ぞ吹く
ぞ吹く

四 なが〳〵し
なが〳〵し
夜もすがら
夜もすがら
ねざめ
ねざめ
ねざめ
ねざめ
物
物
思ふ
思ふ
ころの
ころの
明けやすき
明けやすき
かな
かな

こゝろざし
こゝろざし
深き
深き
人〻
人〻
あまた
あまた
あつまれる
あつまれる
所にて
所にて
秋の
秋の
夜
夜
長
長
きを
きを
題
題
にて
にて
よめる
よめる

あまつ
あまつ
風
風
雲の
雲の
かよひ
かよひ
路
路
吹き
吹き
とぢよ
とぢよ
乙女
乙女
の
の
姿
姿
しばし
しばし
とゞめむ
とゞめむ

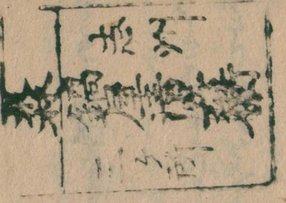
五 かくとだに
かくとだに
えやは
えやは
いぶき
いぶき
のさしも
のさしも
草
草
さしも
さしも
知らじ
知らじ
な
な
燃ゆる
燃ゆる
思ひを
思ひを

在原業平朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]



八

ありこそよ人よをしれそすぐる
ま物へさるくとのみ時の千とも

九

とうさうして旅の空とも

八

山くすみ
つまとまつ
あり
山そ
みそ

九

清
あ

ありまつ
くるよ
甲斐
よう

みつよ

十

こんの千のさ夜ふけ
うて旅の空とんてこう

十一

神まの吹うきみくのこひひの
こすの心

十

ありまつ
くるよ
賀
よう

十一

みつよ

十二 久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

十三 あすからは若菜つまむと妹がいへる野辺の雪まにうぐひすぞなく

十四 春霞たてるやいづこみよしのの吉野の山に雪は降りつつ

十五 梅の花それかあらぬか春霞たちかくせるやどの夕月夜

十二 ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

十三 あすからは若菜つまむと妹がいへる野辺の雪まにうぐひすぞなく

十四 春霞たてるやいづこみよしの吉野の山に雪は降りつつ

十五 梅の花それかあらぬか春霞たちかくせるやどの夕月夜

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55　ガラス使用

もろこしの事

十六 おなじ御時せられける相撲の節下の句

十七 こしをこえ

行末まよ

物名 此うた物名ハ万物ノ名也天地無情ノ事ト
寂寥ノ義ヲ題ニ万葉ノ主ト定四時ノ景ト混ト
未入乃ヲ云也言語道断ノ処也万物ヲ一句ニ
ヲサマラヌモノナキ心ヲ執ヨリ発ル第一ハ寂物自強ノ第
一句ノ如ク第十一モ亦ハ万物ヲ一句ニ収ルノ
類也第二十巻又一句ニ名ハ万物ノ名也ヲ歎草木ノ頑
未動仏菩薩モ同一神ハ法湯不側乃ホトケ
ヘ一物乃ノ字ハ物乃名ヲヨムトキハ乃ヲモヨムトキハ
是ノ字ヨムアリ手以霊ノ成無量乃心也裏説ヲ歌ヲ儛ノ義
也スラスラトヨムヲ云ヘシ名ヲヨムハ名ヲ云ヘシ也
分明(ワカリヨク)ニ理ヲ云ヘシ物乃名ヲヨムトキハ物ノ名ヲ云ヘシ

古今和歌集巻第十

物名　藤原敏行朝臣

一　うくひすの花をくわへてとるてふはわがすきものをぬすまんとや

二　くれなゐのふりいでてこそ身にしみて花のいろをば思ひそめけれ

三　ふるさとの花のにしきをたちかへてみよしの山に春風ぞふく

四　神なびのみむろの山をけふみれば木のもとごとに花ぞさきける

五　あふことをいのちにまつとながらへばこのごろわれにあらぬわが身は

六　ちはやぶる神のいがきもこえぬべし恋しき人のみまくほしさに

七　今こむといひしばかりに長月のありあけの月を待ちいでつるかな

五　おふことをいのちにまつとながらへばこのごろわれにあらぬわが身は

六　ちはやぶる神のいがきもこえぬべし恋しき人のみまくほしさに

七　今こむといひしばかりに長月のありあけの月を待ちいでつるかな

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55　　ガラス使用

きて　なるとも　あかで　別れん　そのつと

八　今も　若菜摘むべく　なりにけり　春日の野辺の　雪の　むらぎえ

九　旅の空　ありとも　告げよ　ほととぎす　をちの里人　聞きつけつべく

十　流れのみ　見きと　聞かれよ　あだ波の　よるべ　知らぬ　身にしあれば

十一

いもやとふ　今こそ　ふるさと　やのそば

十二

春の　宵は　まだ

十三

花ぞ　散る　ころ　ほととぎす　人に　まだ　聞かぬ　声を　聞かむと　待つ　夜　ふけて

ほととぎす　高通ふ　なり　おもふ　人の　夢　うつつとも　なき　物思ひの　頃

十四

あやめ　葺く　軒の　しづく　も　玉に　ぬく　蜂の　巣の　糸

十五

けさ　来ば　こひ　初めてや　ほととぎす

十六

秋　来ぬと　目には　さやかに　見えねども　風の　音に　ぞ　おどろかれぬる

十七

めづらしや　今　やまと　なでしこ　咲きにけり　ふるき　垣根を　人　や　見るらむ

十八

かりがねは　いつ　来　鳴くと　思ふ　間に　萩の　下葉も　色づきにけり

十九

人めも　草も　かれぬと　思へば　藤袴　にほふ　あたりの　夕風

二十

わが　やどの　萩　咲きにけり　ひぐらし　の　鳴く　夕べ　ひとり　来て　見む

二十一

ちるまでも　見る　人も　なき　山里の　岩垣　沢の　秋の　夕暮

二十二

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

二十三

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

二十四

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

二十五

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

二十六

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

二十七

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

二十八

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

二十九

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

三十

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

三十一

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

三十二

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

三十三

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

三十四

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

三十五

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

三十六

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

三十七

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

三十八

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

三十九

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

四十

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

四十一

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

四十二

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

四十三

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

四十四

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

四十五

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

四十六

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

四十七

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

四十八

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

四十九

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

五十

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

五十一

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

五十二

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

五十三

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

五十四

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

五十五

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

五十六

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

五十七

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

五十八

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

五十九

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

六十

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

六十一

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

六十二

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

六十三

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

六十四

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

六十五

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

六十六

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

六十七

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

六十八

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

六十九

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

七十

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

七十一

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

七十二

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

七十三

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

七十四

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

七十五

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

七十六

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

七十七

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

七十八

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

七十九

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

八十

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

八十一

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

八十二

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

八十三

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

八十四

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

八十五

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

八十六

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

八十七

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

八十八

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

八十九

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

九十

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

九十一

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

九十二

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

九十三

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

九十四

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

九十五

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

九十六

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

九十七

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

九十八

あかなくに　まだき　月の　かくるる　は　山の　端　逃げて　入る　かと　ぞ　見る

九十九

ちるまでも　思ひ　分かぬ　あくる　よ　の　むら　雨　を　待つ　ほど　の　間　に　て　も

百

思ひ　いづる　ときは　の　山の　ほととぎす　こゑ　たえず　こそ　人　待つべかりけれ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三百四十四 ろくぢやうにてとをかのつきみるとてよめる 貫之

やまのはをいでてくもゐにかくれなくてらすつきかげをしとやおもはん

三百四十五 つきをよめる 躬恒

つきみればちぢにものこそかなしけれわがみひとつの秋にはあらねど

三百四十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるよりはおほかたのあきのためしにつきをだにみん

三百四十七 つきをよめる 貫之

ひとりぬるとこのあきかぜさむみかもかつきかげのかくるまでにも

三百四十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百四十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百五十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百六十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百七十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百八十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

三百九十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百二十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百三十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百四十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百五十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百六十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百七十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百八十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十一 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十二 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十三 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十四 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十五 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十六 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十七 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十八 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

四百九十九 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

五百 つきをよめる 貫之

ひとりのみながむるつきのかげをだにあかぬこころのそふにやはあらぬ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

さくらあさの
こうひ
こころとも
かへさとく
ふるさと
ちをそ
ちるを
ちるを
ちるを

三十四 そふる

三十五 なかれてはいくせの淵となりぬらむ
あさましかりしよはひなりけり

三十六 おもふどちさけるかはらのうれしきは
きみがちとせのかげにぞありける

三十七 ちはやぶる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

三十八 かきくらす心のやみにまどひにき
夢うつつとは世人さだめよ

三十九 ゆく水に数かくよりもはかなきは
思はぬ人を思ふなりけり

四十 あひおもはでへだてなきをぞ友とはいふ
よしやうはべは見えずとも

四十一 わすれなむわれをうらみじ人の心の
うたがひやすきつねのよなれば

四十二 あきの夜の千夜を一夜になせりとも
あかずおもはむ人はいかがせむ

四十三 秋風にあふたのみこの船出せば
天の戸渡る雲かとぞみる

四十四 あまのかるもにすむ虫のわれからと
ねをこそなかめ世をばうらみじ

四十五 秋ぎりのたつ野のをざさ分けしかば
袖のみつゆにぬれにけるかな

四十六 ふるさとは見るかげもなししかはあれど
月のみぞ昔ながらの光なりける

四十七 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

四十八 ゆく水とのみながせる藻のうきて
われからとしもなびきやはする

四十九 ながれては妹背の山のなかにおちて
はやくも人の見つるかはかな

五十 あひ見ずは恋しきことも知らましを
世の中にこそ人はありけれ

五十一 ゆく水に数かくよりもはかなきは
思はぬ人を思ふなりけり

五十二 ちはやぶる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

五十三 かきくらす心のやみにまどひにき
夢うつつとは世人さだめよ

五十四 あひおもはでへだてなきをぞ友とはいふ
よしやうはべは見えずとも

五十五 わすれなむわれをうらみじ人の心の
うたがひやすきつねのよなれば

五十六 あきの夜の千夜を一夜になせりとも
あかずおもはむ人はいかがせむ

五十七 秋風にあふたのみこの船出せば
天の戸渡る雲かとぞみる

五十八 あまのかるもにすむ虫のわれからと
ねをこそなかめ世をばうらみじ

五十九 秋ぎりのたつ野のをざさ分けしかば
袖のみつゆにぬれにけるかな

六十 ふるさとは見るかげもなししかはあれど
月のみぞ昔ながらの光なりける

六十一 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

六十二 ゆく水とのみながせる藻のうきて
われからとしもなびきやはする

六十三 ながれては妹背の山のなかにおちて
はやくも人の見つるかはかな

六十四 あひ見ずは恋しきことも知らましを
世の中にこそ人はありけれ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

四十三 風のおとをおもひやりてよめる

うらしとていそそくそらも見えぬかな

紙よりはまたとめてかへしてもなほあやしきはこころなりけり

四十四 あづまのかたにまかりける時に、富士の山を見てよめる

時しらぬ山はふじのねいつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ

四十五 かすがにまかりける時に、春日の山をみてよめる

春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

四十六 題しらず

よみ人しらず

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色を増すらむ

四十七 花の香は風のつてにもかよふらむ我が待つ人のたもとばかりは

四十八 花ちれる水のまにまにとめくれば春さへ流るる物にぞありける

四十九 ちる花を惜しむ心やとどまりて我が身は世にもふるにかあるらむ

五十 花の色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに

五十一 小野小町

花の色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに

五十二 題しらず

よみ人しらず

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

五十三 わが宿の花見がてらに来る人は蝶鳥とぞ我は思はむ

五十四 我が宿の花見るほどは思ひやむ事もなぐさむ物にぞありける

五十五 我が宿の花見て暮らしつれば夜も夢にぞ花はみえつつ

五十六 花ゆゑに山をたづぬる我が身をも風にまかせて知らずがほなる

五十七 春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

五十八 花の色は雪にまがひて見えずとも香をだにぬすめ春の山風

五十九 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる

六十 梅の花にほふ春べは月夜にも鶯の鳴きつつ居れば

六十一 梅の花たちよる波の白雪に思ひまがへて折らぬ君かな

六十二 梅の花香をたづねてぞ折りつるあるじ知らずもとめし物を

六十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

六十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

六十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

六十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

六十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

六十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

六十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

七十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

八十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

九十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百二十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百三十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百四十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百五十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百六十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百七十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百八十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

百九十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百二十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百三十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百四十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百五十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百六十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百七十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百八十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

二百九十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百二十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百三十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百四十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百五十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百六十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百七十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百八十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

三百九十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百二十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百三十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百四十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百五十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十一 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十二 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十三 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十四 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十五 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十六 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十七 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十八 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百六十九 梅の花香をなつかしみ折りつれば我が衣手ぞ春めきにける

四百七十 梅の花香をなつかしみ折り

857
55

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『古今和歌集』　請求記号　857-55

ガラス使用